

## ちりめん本とその周辺

鳥居 万恭

書籍にかんする仕事をしている人に「ちりめん本をご存知ですか」と尋ねて、「知っています。」と答えられる人は全体の割にも満たないでしょう。いわんや、ちりめん本を手にとり、あの独特の手触りを感じた経験を持つ人は古書店主、蔵書家、図書館職員の中だけにしかおられないような気がします。さらに、全国でちりめん本をコレクションとして所蔵している図書館、資料館はどれほどあるのでしょうか。いろいろな方途で調査をしましたが、かろうじて10館を見つけることが出来ました。見方によれば10館もあるのかと思われませんが、特別な書物であることを考えれば、各館の収集努力は相当なものだったと推察できます。京都外国語大学の皆さんには、昨年、5月に付属図書館で「ちりめん本展示会」が近隣の中学生と協力して開催され、たくさんの方がご覧になられた事と思います。また、2007年5月には貴校が創立60周年を迎えられ、それを記念して稀観書展示会「文明開化期のちりめん本と浮世絵」が開催されました。その折、ちりめん本の全容を垣間見ることができ、見事な展示目録が出版されています。展示を見ることが出来なかった方は、ぜひ目録に眼を通して、ちりめん本を知っていただきたく思います。

絹織物「ちりめん」は天正年間（1573年～92年）に中国の明から堺へ入ったのが始まりとされ、全国に名をはせた「丹後ちりめん」は江戸時代の中期に宮津藩と峰山藩の領地内で織られていました。絹織物「ちりめん」の美しさを和紙を使って表現し、書籍として出来あがったのがちりめん本です。このちりめん本を作る事を思いついた、最初の人物は長谷川武次郎と言われています。嘉永六年（1853年）に日本橋で生まれ、33歳の時、すなわち明治十八年（1885年）に長谷川弘文社を立ち上げ、欧文挿絵本をちりめん本にして発行します。その多くは日本の説話、お伽噺を英語やフランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語などの欧文に翻訳し

た書籍で、翻訳は明治初めに来日した外国人の力を借りて行われました。本作りには絵師、彫師、刷師がかかわり、絵や文字が刷られた和紙は独自の工程をへて縮められ、和綴して出来上がっています。ちりめん本を販売したのは長谷川弘文社と当時、外国書籍を扱っていた丸善と中西屋です。明治時代に欧米の書籍・文化を輸入した丸善はあまりにも有名です。また、神田神保町にあった中西屋は丸善の創立者である早矢仕有<sup>は</sup>的<sup>し</sup>が明治十四年（1881年）に開いた店で、洋書古本を扱う草分け的な書店でした。中国と西洋の書物を取り扱う書店を表現するところから「中」と「西」、すなわち中西屋と言う屋号が生まれました。外国書籍を購入する顧客には当然、外国人が含まれています。日本の国家建設にかかわった外国人が書店を訪れ、異文化の香りがするちりめん本に思わず手をだす姿が見えてきます。彼らはちりめん本を母国へ持ち帰り、その美しさは家族との団欒の中で思い出の花となったでしょう。

ちなみに、この中西屋があった神田に本屋が顔をだすのは明治十年（1877年）以降です。世界の歴史において、神田に並ぶ書籍街はないと言われていますが、江戸時代は旗本屋敷の用地でほぼ占められ、本屋は一軒ありませんでした。神保町界限で最も早く開店したのが古本店「有史閣」と言われています。のちに「有斐閣」と改め、法律書等を出版し今日まで続いています。近代国家を建設するにはまず、法体系の整備が必要だったのでしょうか。また、大量の出版物を発行できるようになったのも活字印刷が普及し始めたからです。

西洋に追いつこうと、一年、一年、凄まじい速さとなって書籍街が構築されていきますが、過去も振り返り振り返り見直されていたのではないのでしょうか。だからこそ、江戸時代の名残である版本による多色刷り本がちりめん本として新たに登場したと思っています。ちりめん本は昭和初期まで細々と出版され続けたわけですが、後世に書かれた出版史にはちりめん本にふれた箇所はあまりありません。人知れず、消えていった書籍です。図書館等で所蔵されているちりめん本の多くは外国から里帰りの書籍なのです。

とりい かずやす（植物愛好家）